多様化時代の魅力ある音楽高校のあり方

―― 全国音楽高等学校協議会全国研究大会総括と講評 ――

副校長　海老原　直秀

2003年11月14日（金），15日（土）の２日間にわたり，本校を会場として全国音楽高等学校協議会全国大会が開かれた．この協議会は1955年に発足し，48年もの歴史を刻んできた．国公立，私立の音楽高校，高校音楽科，つまり音楽の専門教育を行っている高校によって構成される研究協議会である．第１回は上野学園高校において開催され，前回，本校が会場校となったのは1991年であり，12年ぶりの本校における開催である．

今回の大会テーマは「多様化時代の魅力ある音楽高校のあり方～少子化時代に対応して～」であった．大会第一日目は開会式，総会後に本校の木部敏司教諭による大会基調提案が行われた．多様化時代に音楽高校，そして教師はどのように関わっていけばよいのか？社会が音楽高校に求めるものは何かをともに考え合う．また，全国の音楽高校に先駆けて邦楽専攻を設置して日本伝統音楽の専門教育を行っている本校として，音楽高校における日本伝統音楽の教育の必要性を述べるとともに，研究授業をひとつのきっかけとして日本人が西洋音楽を学ぶ上で，忘れることのできない日本人の感性についても，ともに考え合いたいとの主張であった．

公開授業Ｉは，鈴木芳明教諭による第Ｉ学年の＜国語総合＞の授業で，テーマは「韻文指導について」であった．生徒の韻文への関心を呼び起こす工夫の見られる意欲的な授業であり，俳句や短歌や詩などの創作の意味について考えてみることが，ひいては生徒の音楽表現について考えることにもつながることを期待するという，授業担当教師の視点は評価できるものである．

公開授業IIは，高橋裕教諭による第II学年の＜演奏法＞の授業で，テーマは「日本人と西洋音楽」であった．日本人が西洋音楽を行う場合の問題点を感じさせる授業であり，邦楽専攻の生徒による邦楽の演奏は，生徒たちが日本人の感性について考えるひとつのきっかけを提供する意味で効果的であった．「生徒たちの西洋音楽演奏についての指導者からの指摘」に関するアンケート調査は，実態把握として興味のあるひとつの試みであった．しかし，それに留まらず，今後の演奏教育にとっては，日本人の生徒の演奏に共通するいくつかの特徴の原因について，例えば，日本語のリズム，アクセントや日本人の形式感等についての分析及び西洋語のリズム，アクセント，西洋人の形式感の分析と両者の比較等の研究が，指導に当たる教師に望まれる．その研究の成果を，＜演奏法＞などの授業に生かすことをさらに心がけたいものである．

午後は上野公園内の旧奏楽堂で，本校邦楽専攻生徒たちによる邦楽の公開演奏会で始まった．本校は邦楽専攻を設置して，2003年度末には５年間を経過したことになり，すでに芸大にも卒業生を送っている．箏曲専攻の他に，尺八，長唄三味線，邦楽囃子の専攻も設置されており，現在，その４専攻の生徒が揃っている．当日はその邦楽専攻の生徒総出演であった．宮城道雄作曲の「飛鳥の夢」，大会前の夏に急逝された，芸大邦楽科山田流箏曲の増渕任一朗教授作曲の「春宵」が演奏された．欧米化した日本の生活の中で，弱化しつつある日本人のデリケートな音感覚を再び呼び覚まし，現代に生かすためにも，本校邦楽専攻の教育において，古典の指導の重要性は常に強調されねばなるまい．同時に邦楽アンサンブルの授業を進めていく上で，今までに実例の少ない，

邦楽の異なるジャンル間のアンサンブルのための作曲，編曲が必要となってきた．このためには，邦楽教師や作曲家の協力が必要不可欠である．

演奏会後は再び，本校に会場を移して，以下の３つの分科会に分かれて，研究討議が行われた．第一分科会「音楽と社会」，第二分科会「専門実技と音楽科目」，第三分科会「音楽高校における一般教育」である．

第一分科会「音楽と社会」では，パネラーの本校の沼田宏行教諭による発題「現状の把握と未来への飛躍」においては，特に＜社会対応＞について，地域社会から音楽高校に出張演奏の依頼が来るほどまでに，学校と地域との相互交流を推進したいとの意見が発表された．また，教員の意識変革に関して，社会の多様化とそれに対する学校の対応と教育の充実，将来ヴィジョンの実現と現状からの飛躍のためには，教員の意識変革が望まれるとの問題提起が印象に残った．以上の発題に引き続いて研究討議に入った．まず，今大会の研究討議の準備として，会場校である本校から，全国のメンバー校に対して実施されたアンケート調査の結果について，中でも少子化対応と生徒募集についての試みが話題となった．広報部を設置し，中学校訪問を実施している例，オープンスクールウィークを設けて，中学生と保護者，中学校教員を対象に，学校紹介，授業公開を実施している例が紹介された．公立校，私立校ともに定員未充足の悩みを抱えている学校が多く，中には対策として普通科と音楽科との新しい関係を模索している学校もある．また，私立大学附属の学校では，大学との連携として，附属高校在学中の生徒に大学の授業を受けさせ，当該生徒の大学入学後に，一定の限度内でその修得科目の単位を認定している例の報告があり，これは大学と附属高校との連携の実践として，今後，本校においても大いに参考となり得る例である．

次に入試のあり方について，音楽大学入試科目から，「楽典」「ソルフェージュ」が削除された結果，高校生徒の学習意欲の低下の傾向が見られる関西地方の現況が報告された．入試科目数の削減は大学の学生募集，定員確保の必要性からの苦肉の策のひとつであろうとも考えられるが，音楽高校，音楽大学教育の見地から考えると，このような入試科目の削減については，よほど慎重に構えねばなるまい．

さて，音楽を学ぶ生徒の将来の進路，就職，将来性等についての保護者の不安は，全国的傾向である．もっともこれは今に始まったことではなく，過去のどの時期でもそうであった．これはある意味で今後も避けられない不安であろう．と同時に，人間と音響，音楽との関係がこれほど多様化している現代社会に，人材を送り出す側の学校としては，現代社会のニーズをより現実的に身極めつつ，教育の変革を実行する勇気をも持たねばなるまい．研究討議の中で，特に話題が集中したテーマが，「音楽学習の意味の多様化」である．これに関する討議から以下の必要性が浮かび上がってきた．すなわち，今後の音楽高校教育は，教育の基本理念に，①専門家を育てる教育，②音響，音楽関連分野の人材を育てる教育，③音楽愛好家を育てる教育という三本柱を掲げる必要性があるということである．

音楽高校教育を進めるに当たって，生徒募集等，確かに経営上の難題が存在するのも事実であるが，教育機関としての社会的責任から考えると，人間性，社会性を養う人間形成としての音楽教育という理念が，どうしても必要となってくる．この理念の実現のためには，音楽高校における教育を，今後どのように進めていけばよいのであろうか？私たち音楽高校の教員全てが，自らに問い続けねばならない．

進路，就職等についての生徒，保護者の不安の存在にもかかわらず，この困難を承知の上で，何者にもかえ難い，音楽の持つ美とその豊かさと力に惹かれ，音楽の勉強により深く打ち込む姿

勢が生徒本人に求められる．それとともに，音楽の勉強と音楽高校教育の充実と前進のためには，保護者の理解と協力，忍耐がどれほど必要不可欠なことであろうか？多様化した社会に対応して，単に音楽専門家養成のための教育のみにならず，音響，音楽関連分野への進出や音楽愛好家を育てる教育等の幅広い視野にたち，なおかつ，人間形成としての教育が今，音楽高校に求められている．この実現のためには，音楽高校教育において，音楽実技の教育はもとより音楽理論，音楽史などの音楽科目とともに，普通科目の教育及び学内外における特別教育活動や学校生活における日常の生徒指導がいかに重要であろうか？以上をふまえつつ，かつ，学校の社会対応と将来ヴィジョンの実現のためには，私たち音楽高校教員の意識変革が強く望まれる．

第二分科会「専門実技と音楽科目」では，パネラーの本校の木部敏司教諭による，本校の音楽科目の教育の現状と課題の紹介に引き続き，実技以外の科目，すなわち，音楽史，音楽理論，演奏法，ソルフェージュの教育についての研究討議に入った．これらの科目の学習意欲の弱い生徒に対する教師の対応の例として，例えば西洋音楽とキリスト教，仏教と日本音楽との関係等について，生徒の関心を喚起する授業を試みている例や，生徒が今，実技科目で勉強している曲の楽曲分析を授業で行い，音楽作品構造への生徒の関心を喚起しようとする試み等が紹介された．多くの場合に，生徒の意識の中では，音楽科目，実技科目相互の関連が充分には理解されていないので，教師自身が，科目相互の関連性を意識して指導に当たる必要がある．画一的教育を受けて育ち，主体的に自ら考える力が低下している生徒に，どのように対応すればよいかが教師に問われている．次に実技教育についての研究討議に入り，まず，公開授業「演奏法」の授業担当者で本校の高橋裕教諭から，「西洋音楽演奏に関する指導者から生徒に対する指摘」の生徒アンケートの結果についての報告があった．

それによれば，日本人教師が，演奏技術や音色などの細部について細かい指摘をするのに対して，西洋人教師は，演奏解釈や表現に関する指摘が多い傾向が見られるということであった．但し，今回のアンケートは生徒だけに対するものであり，その結果だけから断定することは避けたいとの留保つきではあったが．この報告をきっかけとして，日本人の西洋音楽演奏についての研究討議に入り，本校の海老原が以下の問題点を指摘した．第一に，アウフタクト感の欠如である．これは日本語にはアウフタクトがないことに起因すると考えられる．第二に，アルシスとテーシスの表現が不得手であることである．これも日本語の強弱アクセントのない，音高アクセントによる二拍子リズムに起因すると考えられる．第三に，和声感とポリフォニー感の欠如である．これも日本伝統音楽が，一部のヘテロフォニーの現象を除けば，基本的にはモノフォニーであることに起因すると考えられる．以上は，西洋の文化が明治期以来流入して，日本人が西洋音楽を積極的に学習してきても，今なお，私たち日本人の西洋音楽演奏における傾向として残っている．以上の問題点を克服するための教育についての討議の中で，音楽演奏の「場」の問題が指摘された．すなわち，響きの空間の問題である．石造りの建物と木造の建物の違いである．ヨーロッパに出かけて，石造りの建物の空間で，生徒に演奏を経験させた実例の紹介等もあった．日本人の西洋音楽演奏の問題点を克服する手だての一つとして，日本語のリズム，アクセントなど音楽的特徴と，西洋語のそれを学習することは効果的である．国語，英語や音楽理論などの科目において，以上の日本語と西洋語との特徴について学習することの意義は大である．また，和声感やポリフォニー感の訓練という見地からのみでなく，西洋音楽そのものの構造的特徴からしても，西洋音楽の演奏教育において，室内楽，管楽合奏，弦楽合奏，管弦楽，合唱など，アンサンブル教育の重要性は，いくら強調してもし過ぎることはない．

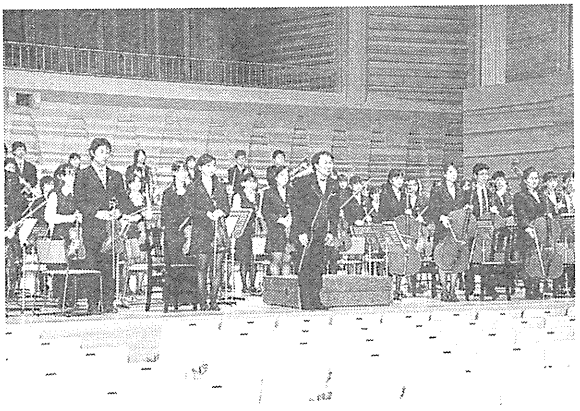
以上の研究討議から，期待される師像が浮かび上がってくる．すなわち，音楽史，音楽理論，

演奏法，ソルフェージュ等の音楽科目における教育は，全て生徒がより豊かに音楽を実現するための助けとなるのであり，担当教師は，生徒のヘルパーとしてのスピリットを持つ必要がある．また，実技以外の音楽科目の教育と学習の重要性を，実技担当教師を始め全教員が認識せねばならない．

第三分科会「音楽高校おける一般教育」では，国語の公開授業担当者である本校の鈴木芳明教諭から，公開授業の説明があった後に，パネラーであり，本校の英語担当の岡真知子教諭による，本校の英語教育の現状と課題の報告があった．生徒は実技の勉強に多くの時間を費やさざるを得ず，英語の学習に費やす時間が少ないという悩み，スピーキングやリスニングは得意であるが，リーディングとライティングを苦手とする傾向等が報告された．また，英語そのものの学習とともに，英語を通して文化や歴史を学ぶことの重要性が指摘された．生徒の英語学習への意欲を高めるためにはどのようにすればよいのか？本校に限らず，音楽高校全体の課題であろう．一般学科の学習と教育において，自ら学習できる基礎力を身につけさせることの必要性が指摘された．また，教員の忍耐力と教育へのあくなき情熱が，まず何よりも重要であることが確認された．文化や歴史，文章表現力，自ら学ぶ姿勢等を一般科目において学習することが，生徒のより豊かな音楽理解につながることは明白であり，このことを普通科目担当教員のみでなく，音楽実技担当教員も含めて，全教員が認識する必要がある．音楽科目担当教員と普通科目担当教員とが協力し，連携して教育に当たる時，生徒がより豊かに音楽を実現するという目的が達せられるであろう．次回以降の研究大会の課題の一つとして，音楽高校における一般教育についての，より具体的な研究協議が望まれる．また，前年度の洗足学園における大会と今大会同様に，授業公開において，音楽科目のみでなく，普通科目の公開をも行い，より活発な研究協議を期待したい．

分科会後の大賀典夫氏による講演「多様化時代と音楽教育」の中心的話題は，どちらかといえば，才能ある生徒の専門教育についてであった．そのためには中学校から専門教育を開始すべきとの氏の持論が述べられた．また，一方，音楽関連企業への進路については，バランスのとれた人間を育てる教育の必要性が指摘され，時代のニーズに応じた多様な教育の必要性についての主張もあった．最後に，音楽のできる経済人を，音楽大学が育てて欲しいとの氏のヴィジョンが語られた．

今回の喜ばしいイヴェントは，大会の最後に首都圏の音楽高校が集いあって，合同のオーケストラを編成し，ドボルザークの交響曲第８番を，本学指揮科の鈴木織衛教官によって，芸大奏楽堂で演奏できたことであろう．これは全国音楽高校協議会としては歴史的に初めての試みであり，日常の各学校における教育活動の合間をぬいつつ，練習時間の確保に苦労しながら，しかし，大成功に終わった．このことは，今後の各音楽高校間の協力と，全国音楽高校協議会の歩みにとっ



て明るい光を投げかけるものとなった.

少子化，多様化の時代に音楽高校の将来は決して楽観を許されないが，悲観し，萎縮し，消極的になることなく，それぞれの音楽高校のヴィジョンを高く掲げて，生徒の持つ可能性と社会のニーズに応えるべく勇気をもって私たちは進もうではないか！